

耳で聴くアート

SMAART 2022年度 記録集

SMAART 佐賀モバイル・アカデミー・オブ・アート 2022 : 耳で聴くアート 記録集



佐賀大学
芸術地域デザイン学部

文化庁 令和4年度大学における文化芸術推進事業
佐賀モバイル・アカデミー・オブ・アート～
オーラルコミュニケーションを核としたアートマネジメント人材育成事業

Saga Mobile Academy of ART 2022 :
Listen Art to Imagine



ごあいさつ

Introduction

「佐賀モバイル・アカデミー・オブ・アート」[Saga Mobile Academy of ART 略称：SMAART] は、佐賀および周辺地域のアートマネジメント人材の育成を目指すプロジェクトです。

本プロジェクトでは地域の方々を対象に 2017 年度からセミナーと実践的な活動を展開するとともに、地域の文化芸術に関する情報や人材が集まるネットワークづくりをプロジェクトの柱としてきました。

本年度より新たに、従来の美術館における「視覚」優位の美術の在り方、および大学における「紙媒体」優位の知の蓄積の在り方へのオルタナティブとして、美術から視覚を取り除くことで逆に「見えてくる」ことに焦点を当てつつ、美術を楽しみ、伝え、支える人材を育成するべく、それぞれ3つのアプローチからネット配信によるラジオ番組作りに取り組んでいきます。ひいては目の見える人・見えない人の共生も含め、多様な価値観を認め合うしなやかな社会の構築にむけてのコミュニケーションツールとしてアートを捉え、マネジメントできる人材の育成に取り組めます。

本書は SMAART の 2022 年度の活動についての記録です。「芸術で地域を拓き、芸術で世界を拓く」をモットーに佐賀大学が 2016 年度に開設した芸術地域デザイン学部によって企画運営される本プロジェクトの記録をどうぞご覧ください。

2023 年 3 月

佐賀大学芸術地域デザイン学部

目次

Contents

ごあいさつ	2
SMAART について	4
2022 年度スケジュール	6

活動 1

アートを楽しむ人の育成	7
耳で聴くアートセオリー + 聴覚で楽しむ美術展	
耳で聴くアートセオリー	8
聴覚で楽しむ美術展	10

活動 2

アートを伝える人の育成	21
わかばリポーターによる音声コンテンツ作り	
公開講座「ひろがる！耳で聴くアートの想像力～その 1」	22
わかばリポーターによる音声コンテンツ作り	26

活動 3

アートを支える人の育成	31
わかばキュレーターによる音声コンテンツ作り	
公開講座「ひろがる！耳で聴くアートの想像力～その 2」	32
わかばキュレーターによる音声コンテンツ作り	35

音声コンテンツ一覧	39
ウェブサイト	40
講師紹介	40

SMAARTについて

About SMAART

佐賀モバイル・アカデミー・オブ・アート (Saga Mobile Academy of Art = 略称: SMAART) は、佐賀および周辺地域のアートマネジメント人材の育成を目指すプロジェクトです。セミナーや実践活動を展開するとともに、地域の文化芸術に関する情報や人材が集まるネットワークをつくりまします。

2022年度 基本コンセプト

- 美術を「見える世界」(造形)と「見えない世界」(思想・概念)が交差する場として捉え、そこに生まれる新たな可能性や価値を発見し、伝え、支えることができる人材を育成する。
- 社会には多様な価値観が存在するという事に気づき、そのことについて話し合い、認め合える人材を育成する。

新しい取り組みとして、3つの柱で活動を展開

活動 1

アートを楽しむ人の育成

耳で聴くアートセオリー + 聴覚で楽しむ美術展

美術史や美学の入門的内容を音声による学習プログラムとしてネット配信した。活動②③受講生に対して美術の基礎的な知識・理論を提供するとともに、美術を学ぶことの楽しさを世間に広くアピールし、将来、美術大学への進学やアートマネジメント関係の仕事を目指す人材予備軍への布石とした。

活動 2

アートを伝える人の育成

わかばリポーターによる音声コンテンツ作り

音声メディア専門の講師による指導を受けながら「わかばリポーター」が身近なアートを取材し、話し言葉で伝える音声コンテンツ作りに取り組んだ。

活動 3

アートを支える人の育成

わかばキュレーターによる音声コンテンツ作り

「わかばキュレーター」が音声による展覧会として各自音声コンテンツ(音声作品発表+美術家インタビュー)制作に取り組んだ。

多様な価値観が共存する地域の未来を創り出せる人材育成

次年度以降

令和4年度



アートをより
楽しむ人へ



アートをより
伝える人へ



アートをより
支える人へ

現代美術史や美学のレクチャーなど

耳で聴くアートセオリー
『近代美術史カセット』
(同『近代美術史テキスト』音声版) 他

→テキストとして章別に配信
→章別に順次ネット配信
※期間後も継続して視聴可

アートセオリー習得

戦後アメリカ美術 / 野獣主義
シミュレシオニズム / ネオ・ジオ
ダダ / イラスト / 立体主義 / 印象派 他



公開ワークショップ

聴覚で楽しむ美術展

講師：石田陽介 / 松尾さち / 濱田庄司

講師

中ザワヒデキ(美術家)
ギャラリーコンパ
石田陽介 / 松尾さち / 濱田庄司

受講対象

美術・表現活動に関心ある高校生・
大学生・社会人(美術に興味を持ち
始めた人、美術・美術史を楽しく学び
たい人)

耳で聴くアートセオリー

活動1

アートを
楽しむ人の育成



対面30名+オンライン視聴100名程度

公開講座

レクチャー
「ひろがる!耳で聴く
アートの想像力~その1」
講師：鶴田弥生 / 忠聡太



順次ネット配信

**わかばリポーター向け
番組制作ワークショップ**

わかばリポーターによる各自現地取材
編集作業
講師：鶴田弥生 / 忠聡太

講師

忠聡太
(メディア研究者)
鶴田弥生
(ディレクター兼ラジオパーソナリティ)

受講対象

メディアリテラシー、アトリテラ
シー、情報発信スキルを磨きたいライ
ター・リポーター・批評家志望の
学生・社会人等(主に初心者対象)
[わかばリポーター] 7組

「わかばリポーター」による
音声コンテンツ作り

活動2

アートを
伝える人の育成



対面30名+オンライン視聴100名程度

公開講座

「ひろがる!耳で聴く
アートの想像力~その2」
講師：中ザワヒデキ / 島袋道浩



順次ネット配信

**わかばキュレーター向け
番組制作ワークショップ**

講師：花田伸一

講師

花田伸一(キュレーター)
中ザワヒデキ(美術家)
島袋道浩(美術家)
ほか美術家5組

受講対象

コミュニケーションスキルやアートマ
ネジメントスキルを磨きたいキュレ
ーターやマネジメント志望の学生
[わかばキュレーター] 4名

「わかばキュレーター」による
音声コンテンツ作り

活動3

アートを
支える人の育成



2022年度スケジュール

Schedule

アートを楽しむ人の育成 ~耳で聴くアートセオリー + 聴覚で楽しむ美術展

9月2日(金) 聴覚で楽しむ美術展

講師：ギャラリーコンパ(石田陽介 / 松尾さち / 濱田庄司) 会場：長崎県美術館

10月 耳で聴くアートセオリー

講師：中ザワヒデキ

- 1.『近代美術史カセット』(『近代美術史テキスト』音声版) A面、B面
- 2.「バカ CG のすすめ」
- 3.「NEO-EXPRESSIONISM」
- 4.「SIMULATIONISM」

アートを伝える人の育成 ~わかばリポーターによる音声コンテンツ作り

7月9日(土) 公開講座「ひろがる!耳で聴くアートの想像力~その1」

講師：鶴田弥生 / 忠聡太 会場：佐賀大学本庄キャンパス / オンライン配信

10月・11月 わかばリポーターによる音声コンテンツ作りワークショップ

講師：鶴田弥生 / 忠聡太 会場：佐賀大学本庄キャンパス / オンライン

10月8日(土) 第1回 自己PR 音声を聞いてみよう!

10月22日(土) 第2回 取材に出かけよう!

10月23日(日) ~ 11月11日(金) 各自取材期間

11月12日(土) 第3回 ブラッシュアップ作業

11月26日(土) 第4回 試聴会

アートを支える人の育成 ~わかばキュレーターによる音声コンテンツ作り

11月10日(木) 公開講座「ひろがる!耳で聴くアートの想像力~その2」

講師：中ザワヒデキ / 鳥袋道浩 会場：佐賀大学本庄キャンパス / オンライン配信

11月・12月・1月 わかばキュレーターによる音声コンテンツ作りワークショップ

講師：花田伸一 会場：佐賀大学本庄キャンパス / オンライン

11月18日(金) 第1回 イントロダクション

12月2日(金) 第2回 どんな番組を組み立てますか?

12月24日(土) 第3回 アーティストインタビュー収録

1月13日(金) 第4回 試聴会

活動1

アートを

楽しむ人の育成

耳で聴くアートセオリー + 聴覚で楽しむ美術展



耳で聴くアートセオリー

1 『近代美術史カセット』

（『近代美術史テキスト』音声版）A面・B面

講師：中ザワヒデキ（美術家）

元音源：中ザワヒデキ『近代美術史カセット』（アロアロインターナショナル、1990年）ニューペインティングやシミュレーションアートをモダニズムの観点から解説した中ザワヒデキ『近代美術史テキスト』（トムズボックス、1989年）の音声版。一部省略箇所あり。

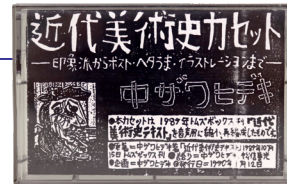
視聴者の感想

① -1 近代美術史カセット(A面)

アートを作る中で芸術家は、避雷針を立て雷を眺めてみたり、その日の日付を記入していったりと、発想が異次元であると感じたネオ・ジオの真意で、前期後期のモダニズムの違いについて知りたかった。時代の変化で幾何学的な作品からシミュレーション 100%に代わっていったことを初めて知り、芸術の時代の変化について未知の部分が多いため、もっと知識を増やして、芸術を楽しみたいと感じた。

① -2 近代美術カセット(B面)

動画の中であった、ユムラテルヒコ氏の日本の反イラストレーション史が始まった時、ヘタウマ、ヘタヘタ、ウマウマ、ウマヘタの順にわけられると定義したのが考え方として面白いと感じた。中ザワヒデキ氏も仰っていたヘタウマの表現主義的イラストレーションは私も好きで日本のアーティストではないが、その話の音声聞いた時に自然にバスキアの作品を思い浮かべた。めちゃくちゃに見えるが勢いがありパワーを貰えるような作品がヘタウマには多いのかなと思った。目が見えない状態で耳だけでどれほどグラフィックが広がるのかなと聞く前は思っていたが、目が見えない分想像力が広がって面白いイメージの映像が頭の中に広がり興味深かった。

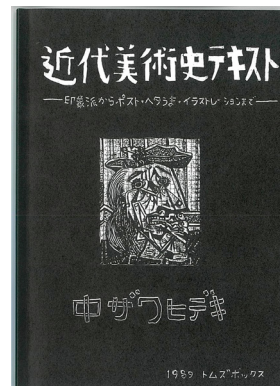


A面

- 序
- 第1章 印象派
- 第2章 野獣主義と立体主義
- 第3章 ピカソ「ゲルニカ」とマチス「ナスターチウムの花と《ダンス》」
- 第4章 戦前期20世紀美術
- 第5章 「ダダ」とはお馬ドウドウの意味
- 第6章 戦後アメリカ美術の誕生
- 第7章 ジョーンズとジョーンズ以後
- 第8章 フォンタナ「空間概念」
- 第9章 イヴ・クラインと三木富雄の時代
- 第10章 現在美術（その1）
- 第11章 現在美術（その2）
- 第12章 ネオ・ジオの真意
- 第13章 シミュレーション100%：ジェフ・クーンの「芸術？」（前半）

B面

- 第13章 シミュレーション100%：ジェフ・クーンの「芸術？」（後半）
- 第14章 ヘタウマ・バルコ・反イラスト
- 第15章 スージー・甘金とイラストの心



② 「バカ CG のすすめ」

『デザインの現場』1990年12月号、美術出版社、pp.50-55)

講師：中ザワヒデキ (美術家)



視聴者の感想

②「バカCGのすすめ」

ところどころ同時に言おうとしてバラバラになる感じが笑えて、バカっぽいなと感じました。美術についての話なのに高尚さのイメージが薄れて小学校の音読みみたいで面白かったです。

③ 「NEO-EXPRESSIONISM」

『美術手帖』1990年7月号、美術出版社、pp.80-81)

講師：中ザワヒデキ (美術家)



視聴者の感想

③「NEO-EXPRESSIONISM」

時おり二重の声を混ぜることで、語りかけられている感じがした。いつ出てくるのかドキドキする。聞いている人に直接語りかけるのに効果的だと思った。"おまえ"に語りかけている。ホラーとかに使えそうと思った。内容に関して。量と質は正の相関があると私は思っている。芸術家が炭鉱のカナリヤで未来を見通すのなら、市井に生きる人々は現実を見ることに長けているとも考えられる。その時代を表すには、一般市民がたくさん作品を産み出していくことが肝要だと思う。

④ 「SIMULATIONISM」

『美術手帖』1990年7月号、美術出版社、pp.82-83)

講師：中ザワヒデキ (美術家)



視聴者の感想

④「SIMULATIONISM」

シミュレーションにズムはいかに装うかという課題を持っていましたが、これは現在のものまね文化にも似ていて面白いと思いました。

聴覚で楽しむ美術展

講座詳細

日時：2022年9月2日(金) 14:00～16:00
会場：長崎県美術館(長崎県長崎市出島町2-1)
常設展示室第1室・第2室及び2階アトリエ
講師：ギャラリーコンパ(石田陽介・松尾さち・濱田庄司)
参加者：9名
協力：長崎県美術館

タイムテーブル		
	スタッフ	参加者
11:00	会場設営	
12:00-13:00	休憩	
13:00-13:40	打合せ	
13:40	受付開始	
14:00-14:10	挨拶・説明・デモンストレーション	
14:10-15:10	美術鑑賞(グループごとに)	
15:10-15:20	休憩(鑑賞カードの記載含む)	
15:20-16:00	振り返りワークショップ、レクチャー、質疑応答	
16:00	終了	
16:00-17:00	反省会	

やってみよう！聴覚で楽しむ美術展！

用意するもの

- アイマスク
- 参加証（必要であれば）
- 参加者：3人以上
- スタッフ：1人（3人組に対して）
- 作品：各班3点
- 会場：できるだけ広く



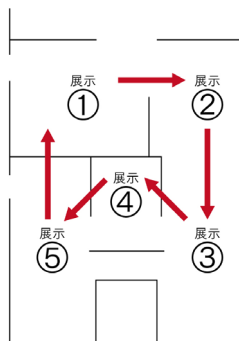
鑑賞会のすすめ方

- 1) 3名一組で3会場を回る ※1
- 2) 会場に入る前に1名がアイマスクをする
- 3) アイマスクをしていない2名の内、1名が作品を選ぶ
- 4) 1作品 20分間で
 - 1～2分：作品の選定（1名）
 - 12分程度：作品の解説（2名）
 - 5分程度：アイマスクを外しての作品の鑑賞

※アイマスクを外すタイミングはスタッフが伝える（おおよそ終了5分前）
 ※作品のタイトル、キャプションは読まずに選ぶ
 ※鑑賞した作品のタイトルはスタッフが控えておく
- 5) 次の部屋に入る前にアイマスクをする人が交代をする（以降3, 4, 5の繰返し）
- 6) 3会場回ったらアトリエに戻り鑑賞カードを書く ※2
- 7) 全体で共有する

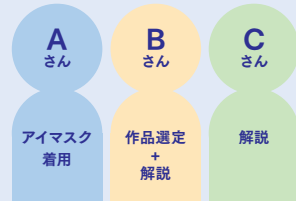
鑑賞順〈例〉

- 1班 ①→②→③
 2班 ②→③→④
 3班 ③→④→⑤

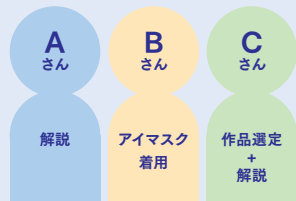


※1

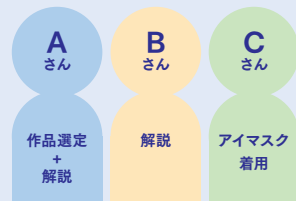
1作品目



2作品目



3作品目



※2

鑑賞カード (アイマスク着用)

班	氏名
作品名	
アイマスク装着時の作品のイメージ	
アイマスク脱着時のイメージ	
感想	

鑑賞カード (解説者用)

班	氏名
作品名	
作品を選んだ理由 (選定者のみ)	
説明に工夫した点	
感想	

デモンストレーション



鑑賞会：1班



鑑賞会：2班



鑑賞会：3班



振り返りワークショップ



スタッフ打合せ・反省会





解説者

説明に工夫した点

見手でもしてもらったようにサイズと手で伝えた。
ただ色を伝えるた「リト」はく明るのか暗いのか
まじ伝えた。線の感じはど、想像しせす
ものに例えて伝えた。

作品全体から受けた印象を積極的に伝えた。
画面にある大きな要素（~~ひた~~、建物、空など）を
画面の半分から ^{左右止など}〇〇で伝えた。千がたの仕上げを
手のくみ方で説明した。

最初に見えたもの ~~は~~ ^{では} 違う見え方かなにか
考へながら説明しました。「他の人にはどう見えるか？」の
視点もつつ。

初めて自分の尺、たこことを
伝える難しさを学んだ。
自分が感じたことと
他の人が感じていることと
違っておもしろい。

解説者
感想

自分の小ささを持った感じ。

、せいかくいつたえり必要
・2スリをした後 ~~は~~と説明のしかたが変わった。
・見え方から自由に染めよう

アイマスク装着者
アイマスク脱着時のイメージ

なるほど ~~~
どうとも ~~~

おおむね同じようなイメージのまじり合いが、より激しい楽しみがあった

自身が感じていたイメージと解説の内容がピッタリあって、楽しい身ぶりでした。

アイマスク装着者
感想

人の感じているイメージを
自分が見えたいという状態をイメージするのが
新鮮だった。

「おたまりの中でできた作品」と
「目の前にある作品」の
どちらも楽しめてよかった。

不安/虚無的
✓
自分の中にできたイメージは
とんとん引っぱられていった

人の言葉で世界がとんとん
(は、きり)と生き生きと見えて
面白かった。

ふりかえり

このワークショップの主旨はタイトルの通り「耳で聴くアート」だ。五感の内、聴覚は感情を動かす力がほかの感覚より強いそうだ。見えないことを体験することが目的ではなく、言葉でアートを表現し、想像するという新たな切り口から新しいアートの魅力を発見しよう!というのが今回の試みである。

講師には、視覚障害者と晴眼者が、目の見える見えないといった互いの個性を活かし合い、共に語らいながらアート鑑賞を行う活動を続けられているギャラリーコンパの3名をお迎えした。

講座は

- ・3名一組で作品鑑賞を行う「美術鑑賞会」
- ・感想を共有する「振り返りワークショップ」

の2部構成で行った。鑑賞会では1名がアイマスクを装着することで視覚情報を遮断し、2名で作品の選定、言葉で表現し、伝える作業を行う。伝え方、表現方法に決まりはない。

鑑賞が2作目、3作目と進むにつれ選ばれる作品は「表現しやすいもの」から「表現し甲斐があるもの」に移り、形や色、サイズといった比較的具体的に伝えやすいものから、「聞こえてきそうな音楽は」、「会話は」、と各々の価値観や経験の違いから想像力が膨らむような主題へと移っていった。その変化は参加者それぞれで楽しみ方を作り出しているようでとても印象的だった。

鑑賞時間が残り5分になったところで、スタッフの合図によりアイマスクを外してもらった。伝えられた情報で想像した作品と目の前にある作品を見比べた感想として多かったのは「もっと大きな作品を想像していました」というものだった。頭の中には実際より大きな空間が広がっていたのかもしれない。

鑑賞後の振り返りワークショップでは、まずグループ内で改めて作品について感想を共有し、その後参加者全体で共有を行った。参加者全員が表現者とそれを受ける立場の両方を体験できたことで「1度で2度美味しい体験ができた」と感想を持たれた参加者も多かった。この試みによって障害のあるなしに関わらず言葉によって「見える世界」と「見えない世界」の接点を生み出し、表現し、気づきあい、認め合う場になったと実感している。

参加者が、目の前の作品を言葉で伝える難しさに戸惑いながらも、その難しさも含めて鑑賞を楽しもうとしていた様子が印象的でした。伝える言葉も、客観的なディスクリプションから、次第に「〇〇な感じがする」といった主観を織り交ぜたものに変化し、会話が活発になっていきました。今回は、他人の感覚を取り入れながら自分の脳内に作品をイメージして味わう、「聴く」ことがメインの鑑賞と想像していましたが、いざ実践してみると、話し手と聴き手がお互いに、自らの感覚や考えを整理して伝え合う「話す」鑑賞でもあるように思いました。

堀越蒔李子 / 山口百合子 (長崎県美術館エデュケーター)

講師コメント



ギャラリーコンパ (石田陽介 / 松尾さち / 濱田庄司)

「聴覚で楽しむ美術展」においては、目隠した一人の参加者へと、他の参加者たちが視覚芸術と呼ばれる美術作品を言葉で説明し、目隠した人の鑑賞をケアする行為へと焦点が集まりがちである。しかし「ギャラリーコンパ」同様に、実は目隠していない参加者側へとケアが照り返されていくケアリング(ケアの輪)を派生させる構造を、このワークショップは孕んでいる。ケアリングについて、哲学者メイヤロフは「相手を育てることであり、自己実現を助けることであり」と述べるが、さらには運営スタッフ側にもその輪は広がりを見せ、会場には終始ウェルビーイングな時間が流れていった印象を持った。

アンケート

年代 10代(1名) ・ 20代(5名) ・ 50代(1名) ・ 60代(1名) ・ 70代以上(1名)

お住まいの地域 佐賀県(2名) ・ 福岡県(3名) ・ 長崎県(3名) ・ その他九州地域(1名)

内容はいかがでしたか 期待以上だった (9名)

難易度はいかがでしたか ちょうどよかった(7名) ・ 易しいと感じた(2名)

受講生の感想

めちゃくちゃ楽しかったのもっとやってほしい!(20代 大学生)

次はもっと体を動かして作品鑑賞できるような方法を考えたいです(20代 大学生)

とてもためになるワークショップでした!見るアート、聞くアートの勉強になり今後とも宜しくお願いします(70代 社会人)

もっとやってほしい!とても面白かったのでいろんな人に体験してほしい(20代 社会人)

視覚の大切さを感じれたと思います。また、自分のイメージと相手のイメージの違いを楽しめたと思います。音のイメージが印象に大きな違いがあって面白かったです(20代 大学生)

とても面白かったです。こんなに時間をかけて一つの作品を見ることがないし、他の方と感想を共有することも(ほとんど)ないので。コロナ禍で周りの人との間に高い壁を作りがちだったので「人との関わり」について考える機会になりました。知らない方々とのコミュニケーション?!ほとんどないので楽しくてビックリ~でした。固定概念、自分の常識の枠を壊すのが好きなのでとても楽しかったです!年を取ると固まりがちだからいい機会を与えていただき感謝です♡アイマスクで歩く時が cho不安~。いい体験させていただきました。(60代 社会人)





活動 2

アートを

伝える人の育成

わかばリポーターによる音声コンテンツ作り

公開講座「ひろがる！耳で聴く アートの想像力～その1」

講座詳細

日 時：2022年7月9日（土） 14:00～16:00

講 師：鶴田弥生（ディレクター兼ラジオパーソナリティー） / 忠聡太（メディア研究者）

会 場：佐賀大学本庄キャンパス / オンライン

ふりかえり

「わかばりポーターによる音声コンテンツ作り」のキックオフイベントとして行われた本講座は、未だ続くコロナ渦の影響もあり、会場参加に加えオンライン配信（音声のみ）も行った。

この講座を企画する中で、現代美術の表現の幅が広がる中、そのキュレーションが空間を埋めていくのみの作業でいいのだろうか、もっとキュレーション側の選択肢も増やせないだろうかという思いが出発点にあった。これまでの美術鑑賞は、主に視覚情報に頼っている。その点、現代美術は（美術館などの）空間から飛び出し、日常で耳にする音を背景にしたものや音を作品そのものにした例も多くその幅を広げている。

作品を鑑賞するときに「正解」を解説してもらうことが正しい鑑賞のようにになっているが答え合わせのような鑑賞は面白くない。

自分の解釈が間違っていたらどうしようとする人が多いが、受け止め方、感じ方が違うことのほうがずっと面白いはずである。評価の物差しが違うことは優劣ではなく、当然正解は人の数ほどあっていい。

現代のメディアは話の間や息遣いなどをカットしたものが多く、私たちは呼吸の浅いものに慣れてきているのではないだろうか。声は、体の中から出てくるものであり、より「個」であるにもかかわらず、他人に対し「どう映るか（見えるか）」ほど「どう聞こえるか」ということは意識されていないように感じる。

この取組みはアートを題材に、削ぎ落してきた豊かさ、間やノイズを取り戻し、受け取る側が意味や豊かさを読み取れるよう、現代の流れにささやかな抵抗を試みるものである。



講師コメント



忠聡太（メディア研究者）

アカデミックなイベントでは、音声のみでの配信はまだ異例です。自分も全編で声だけを使用する形式には初めて挑戦しましたが、いざ始めてみると会場にお越しいただいた方々が熱心に耳を傾けてくださったことにも助けられ、大学のゼミのような密室感のある議論を広く届けることができる可能性を発見できました。この日に交わされた対話の成果は、のちに続くワークショップにもつながり、多くの学びを得られました。



鶴田弥生（ディレクター兼ラジオパーソナリティ）

情報発信で音声に特化するの不自由で劣る行為か？——視覚に訴えられないからこそ、発信者は“言葉にできない”先を手繰り寄せ、相手の理解を想像し、この瞬間と記憶とを総動員しながら伝える。この熱量は、視覚に頼る情報とは違う価値を生み出す。受信者は発信者の小さなため息や僅かな声の表情の変化からも豊かな情報が発せられていることに気づく。アートを介し影響し合う IN PUTと OUT PUTのループを皆さんと楽しみたいと感じた。

受講生の感想

今日この機会に聴くことができてよかったです。とても興味深いお話でした。ありがとうございました。今、言葉には限界があると思って諦めていた節があったのですが、私が普段認識しているのはただ意味を伝達するものというものでした。でも言葉には、言葉だけでなく様々なメディアにはいろんな可能性があることを知りました。表面をかすったものではなく自分の言葉を探して行きたいです。

インプットが大事だという話は聞いてきたけどやっぱり頭を使わずに生活してきた自分に改めて気づきました。誰かに伝えようと思って毎日を過ごしていない人が何かに気づいて何かを創造し伝えることはできないですね（20代学生）

私も過去に情報発信に関わる取り組みに参加したことがあり、自分の心が動いたところを熱量を持って伝えることで相手にも伝えられるという点はとても印象的でした。どんなことでも自分の心が動いた瞬間を記録しておくことが必要だと思いました（10代学生）

姪っ子と一緒に美術展見に行った時のこと。小学生の子どもでも感想を書いて、と言ったら「何を書いたらいいかわからない」と。わからないことをかけないということを知りました。

「アートは自由に鑑賞していい」ということを少しでも伝えるには？アートを鑑賞するときの自分のみかた、ラジオの面白さ、自分が面白い、難しいと思っていることを言葉にして聞くことができて面白かった（40代社会人）

視覚芸術としての比率が多いアートが耳から想像力を膨らませて、それぞれの作品が出来上がるイメージは面白いなと思いました。アートは言いよどむことの方が多くかもしれないので、それをそのまま伝えることの大切さもいいなと思いました。鶴田さん、忠さん、花田さんの話を聴いて自分自身も正しさや他の人からどう思われるのかという恐怖から言葉を話すことの不安がいつもあるように思いました。しかし、自分が感じたままの言葉で伝える、そちらの方が、印象の残る話し方やイメージを伝えることができるということを胸に話せるようになりたいです（30代社会人）

ことばを使い、ことばをこえて。

人それぞれのイメージネーションで、

聞いたときに発見し、

実際の作品に対峙した時にまたさらなる発見ができるような、そんなコンテンツを作れたら最高だなと思いました。（40代社会人）

言葉で伝えることに苦手意識があるのでとても興味深かったです。講座はもちろん、個人的には講座後の3人の雑談が面白かったです。（20代 社会人）

アンケート

●参加者：24名（会場参加：7名・オンライン参加：17名）※24名参加の内アンケート回答は9名

職種 大学生（4名） ・ 社会人（5名）

年代 10代（3名） ・ 20代（2名） ・ 30代（2名） ・ 40代（2名）

内容はいかがでしたか 期待以上だった（7名） ・ 期待通りだった（2名）

講座の難易度はいかがでしたか ちょうどよかった（9名）



わかばリポーターによる 音声コンテンツ作り

講座詳細

日 時： 2022年10月8日、22日、11月12日、26日（すべて土曜日 14:00～17:00）

会 場： 佐賀大学本庄キャンパス / オンライン

講 師： 鶴田弥生 / 忠聡太

参加者： 7組 計9名

第1回 自己PR音声を聴いてみよう

2022年10月8日（土）14:00～17:00

初回のこの日は、受講生に事前に提出された課題「自己PR音声」を視聴することから始まった。「自己PR音声」収録の条件は1つだけ、「自己紹介を3分にまとめて録音」してくださいというもの。それぞれに個性豊かで、時間も内容も指定通りの作品が並んだ。受講生のPR音声があまりに素晴らしかったので、「制限時間20分!人のやり方で1分間のPRを再収録!」という更なる課題がでた。「人のやり方で」というのは課題の収録方法のことで、

- ・原稿を準備していた ↔ 原稿を準備しない（いきなり本番）
- ・ゆっくりと音楽のように淡々としたリズムで ↔ 少し早口でたくさんの情報を詰め込み型
- ・自身の現状をまとめたもの ↔ 自身の趣味趣向をまとめたもの
- ・効果音あり ↔ 静かな環境 etc...

あえて自分が選択しなかった収録方法で2度目の自己PRにチャレンジしようというもの。

無音の環境から屋外に出て車の行きかう音や鳥のさえずりの中語る人、原稿を準備しない自由な語りから原稿の準備にトライしてみる人…。それぞれに自身の型を外してその面白さを実感する受講生が続出な中、前半の指摘に対しても、後半の無理難題に対しても果敢に挑む受講生の対応力の速さに、一番興奮していたのは講師陣かもしれない。



第2回 取材に出かけよう

2022年10月22日(土) 14:00～17:00

これから行われる取材に際し留意点や使用する収録機材について、受講生一人一人の取材対象を聞き取りながら個別に具体的にアドバイスがなされる回となった。講座が進むにつれ、主催者が思ってもみなかった方向に、とても面白い展開になってきた。

企画の主旨は「身近なアート」を取材し、音声(ラジオ番組として)でその魅力を伝えるというもの。おおよそ「アート」とは美術館、展覧会、ギャラリーに並ぶ作品を想像する方がほとんどかと思うが、「身近な」という表現を独自の視点でとらえている受講生が多く、切り口は斬新だ。そこに講師のアドバイスが足されることでさらにアイデアが膨らみどんどん面白いものが出来上がりつつある。

収録機材に関しては、今はスマートフォンでもかなりの性能があるらしいが、やはり専門の収録機を使うとノイズの調整や別方向からの音を一度に録音出来たりと機能も多種多様になる。



各自取材：10月23日(日)～11月10日(木)

第3回 ブラッシュアップ作業

2022年11月12日(土) 14:00～17:00

今回はパイロット版の視聴会を行った。事前に、提出された作品を共有したうえで、制作者のコメント、講師からのコメント、他受講生からのコメントを交えながらその一部を視聴した。頷きの多い作品、笑いが漏れる作品、爆笑が起こる作品……。どうしたらもっといい作品に仕上がるのか、講師陣も受講生も真剣に取り組む。

個性豊かな作品が完成間近だ。



第4回 試聴会

2022年11月26日(土) 14:00～17:00

WS開催の2日前に設けた作品提出締め切りに対し、ほとんどの受講生が締め切り前に提出を終え、この日の講評を待った。前回のアドバイスを受けさらにグレードを増した作品は、個性的で、やはり素晴らしいものばかりだった。

サラッと完成させたようで実は苦労した様子をホロっとこぼす受講生もいた。それでもなお、新たに企画したい番組があるとかで第二弾を企む受講生もいるようだ。

公式サイト上で公開したところ、楽しみに待ってくれた方もいたようで反応は上々の様子だ。



講師コメント



鶴田弥生 (ディレクター兼ラジオパーソナリティ)

受講者の皆様にとって、万能ではない言葉を主にした聴覚にアプローチする表現は、当初はもどかしさや不自由さを感じたかもしれない。しかしながら、言葉を探することは自己を見つめることであり、相手を思いやることでもある。だからこそ、言葉を使うことでしかわかり合えないこともある。聴覚からの想像は、アートを楽しむ心と同様に自由な世界が広がっていることを体感して頂けたのではないだろうか。そう思うのは、「他の誰でもなく、あなたにしかできない」成果物に全ては現れ、歩んでこられた人生が反映されたチャレンジングな表現は、その人自身の魅力をも確かに感じられるものだったからだ。

——素晴らしい感性に多くの刺激をもらいました。心より感謝しています。



忠聡太 (メディア研究者)

最初の自己紹介課題からオリジナルの制作に至るまで、どの段階でも発見だらけのすばらしいワークショップを受講生のみなさんにつくりあげていただきました。日本ではまだラジオ番組やポッドキャストの制作が市民レベルではそれほど普及しておらず、その方法を体得するだけでも大変です。その上「音声だけでアートを伝える」という雲をつかむようなお題と向き合わなければなりません。しかし、いざフタを開けてみれば、ゼロベースならではの前代未聞のアイデアが次々に湧き出してきました。実際に仕上がった作品はもちろんのこと、さまざまな音声にみんなでじっと耳をすましていたあいだのドキドキ感を共有できたことが、最もかけがえのない成果になったのではないのでしょうか。おたがいに手探りの状態での挑戦だったからこそ、他者の試みに対して誰もが親近感と思いやりをもって接することができたように思います。

成果物

ユウカイ犯(?)とアート体験

山口修平

16'49"

美術館に入るときって何か緊張します。
お酒落な店に入ると似た感覚です。
なにせ私は、美術初心者なのですから。

美術がお好きな皆さんは、初めて美術館に行った日のことを覚えて
いますか？

アートをもっと自由に気軽に楽しみたいと思ってくれる人を増や
したい。
そんな思いで制作しました。

お聞き頂き、感じ取ってもらえると幸いです。

「それってあなたの感想ですよ？」
「はい、そうです。私はこの気持ちを大切にしたいのです」

中尾絵里と「にがお絵」

描きまショー！

中尾絵里

48'21"

身近なアートである「にがお絵」を描きあいっこしませんか？

アートが大好きな私、中尾絵里と、自分が住んでいる福岡県筑後地
域におすまいの皆さんに
ご協力いただき、お互いの似顔絵を描きあいっこしました。

描き直し無し、一発勝負で似顔絵にチャレンジ！

さてさてどんな作品が生まれたのでしょうか！？

どうぞお聴きください。

一度見えたら見えなくなる

副島 / 植松 / 柴田

51'00"

●副島
今回の講座に誘った人。柴田、鎌田が所属する同人美術団体の主宰
のくせに大学時代は地理学を専攻していた。

●植松
副島の会社の先輩で、デザイナーをしている。鎌田、柴田とは初対
面だったが副島のせいで旅行に行くことになった。

●柴田
副島と鎌田の同級生。彫塑専攻だからか、構造が複雑でおしゃれな
服を着ていることが多い。

●鎌田
講座には参加していないが、わけもわからず旅行に参加する事
になった。かわいい女の子のイラストが上手。

Artで福祉を拓く

田中美佳 (協力: 栢谷剛)

14'54"

視覚にハンディキャップがあっても音声で書かれていることがわか
ります。画像は声で読むことはできません。始めから画像の内容を
文字で書いておくことで読むことができますようになります。ALT(お
ると)、代替テキストといいます。スクリーンに映し出される 10
枚の写真を音声でご紹介します。どんな風景を想像しますか？

Physical graffiti

古賀隆正

5'28"

20 年前の記憶をたぐり寄せてみました。
当時主流でありましたカメラ付き携帯電話が全てを記録してくれ
ていました。
これまでは言葉にする必要がなかった高々 20 万画素の画像たちで
すが、
けなげにも解凍されるこの瞬間を待ち続けていたのですね。

そういえばいつも
父のお見舞いの品はカセットテープでした。
ひろきの歌
よしのピアノ
カセットテープの中にあるのはいつも音の記憶

点滴のチューブが鬱陶しく
かと言って、声もだせずに横たわるあのひとに
枕もとのカセットテープを鳴らしてあげてください。

キッチンでギャラリートーク

川浪綾乃

18'20"

ラジオを作るのは初めてで、難しいことはできないと思ったので、
一番身近な場所で好きなことを話すことにしました。

テーマはお気に入りの器
会場は一人暮らしの台所
観客は同じアパートに住む友達です。

実際にやってみて、これはまるでギャラリートークみたいだと思
いました。
身の回りのものにアートの目を向けてみると、新しい魅力が見え
てきます。
ぜひ、あなたのお部屋でも素敵なものを探してみてください。

受講生の感想

知らないものにどうやって立ち向かえば良いかが分かった。(20代 学生)

参加した素直な感想としては、参加して本当に良かったと思います。
はじめは自分の制作・作品の幅を広げられればというような気持ちで参加しましたが、音声コンテンツならではの強みや生かし方を参加者みんなで模索していったのは、ただ一方的に教わる講義のような形を越えた「作品」になっていてとても良かったと思います。(20代 学生)

割と苦勞して編集したので、肯定的に捉えてもらえて嬉しかったです。(20代 Web ディレクター / 美術団体主宰)

音声について全く知識がなくて軽い好奇心で参加したため、最初は「私すごい場違いだな…」と感じました。
正直、怯えていました。
しかし、いい所を探して褒めてくださったり、優しくアドバイスをいただけてとても安心しました。
これまで、自分の話し方や声に自信が無いから発言が出来ない、という事もありました。
これに関してはどうしようもないのでは無いかと考えていました。
しかし、今回頂いた話し方の知識等意識することで変えられるのではないかと発見出来ました。
ラジオ制作以外でも、日常や仕事でいかにせるものだと思います。(20代 Web デザイナー)

時間の制限もあり、予定していたインタビューも実行できず、心残りあります。(60代 一般)

自分の中の枠が外れて価値観が広がった (50代 福祉団体職員)

さまざまなジャンル、普段なかなか接することのない年代の方々と参加でき、またアート、音、ラジオのプロの方に講義をしていただき、それぞれのキャラクターに応じた細かなアドバイスをいただき、非常にためになり、また自信になりました。(40代 フォトグラファー)

自分の話を面白いと感じてくれる人がいると知り、自分の知らなかった得意分野を発見することができた。表現を行う際に視覚を使うよりも聴覚や、その他の感覚を使う方が面白くなるかもしれないと考える視点を得ることができたので、今後の表現活動や大学の課題解決で大きな武器にできると感じた。(20代 学生)

他の参加者の皆様の多様な作品に圧倒されました。伝え方や声による伝わり方について考えるようになりました。(福祉団体職員)

アンケート

●参加者：9名

職種 大学生 (3名) ・ 福祉団体関係者 (2名) ・ Web ディレクター / 美術団体主宰 (1名) ・ Web デザイナー (1名)
フォトグラファー (1名) ・ 一般 (1名)

内容はいかがでしたか 期待以上だった (8名) ・ 期待通りだった (1名)

講座の難易度はいかがでしたか ちょうどよかった (5名) ・ 難しく感じた (4名)



活動 3

アートを

支える人の育成

わかばキュレーターによる音声コンテンツ作り

公開講座「ひろがる! 耳で聴く アートの想像力~その2」

講座詳細

日 時： 2022年11月10日(木) 13:00～14:15 (アフタートーク 14:45～16:10)

会 場： 佐賀大学本庄キャンパス / オンライン

講 師： 中ザワヒデキ (美術家) / 島袋道浩 (美術家)

司 会： 花田伸一

この講座について

「わかばキュレーターによるラジオ番組作りワークショップ」のキックオフイベントとして行われた本講座はコロナ渦の影響もあり会場参加に加えオンライン配信 (音声のみ) も行った。講師の過去作品の中から「音」にまつわる作品を中心に紹介。島袋からは「二度起こること一象の話」「キューバのサンバ」の紹介のほか、かつて自作に寄せて書いたテキスト2本を作者に代わりその場の受講生に朗読してもらい試みが行なわれた。中ザワからは『近代美術史テキスト』を朗読した『近代美術史カセット』の紹介および「方法主義宣言」に基づいて作曲された複数の「方法音楽」作品が紹介された。受講者アンケートでは、はじめ「耳で聴くアート」と言われてもピンとこなかったもの実際に作品や朗読を耳で聴いた後はその新鮮さや発想の面白さに大いに刺激を受けたという声が多数寄せられた。

アフタートークでは少人数に絞られた参加者ととも本編を振り返りつつ「良い作品とは」「アーティストにとって成功 / 失敗とは」「アーティストの作品と日常生活の一致 / 不一致」などの話が展開された。





講師コメント



中ザワヒデキ（美術家）

{ 1, 3, 5, 7, 9, 13, 15, 17, 19, 35, 37, 39, 57, 59, 79, 135, 137, 139, 157, 159, 179, 357, 359, 379, 579, 1357, 1359, 1379, 1579, 3579, 13579 }・・・200字くらいになったでしょうか。今回の講座の感想を書こうとしたら、またひとつ作品ができてしまいました。



島袋道浩（美術家）

やったことのないことを面白い人間なので、声だけを想定した作品のプレゼンを考えること、楽しめました。

自分が30年近く前に書いた作品のテキストは、もう自分から遠いところにあるような感じもします。もう自分のものではないような。

それで生徒の方二人に、彼らの声で読んでもらいました。それはやっぱり僕のものでしょうか？それとも彼らのものだったのでしょうか？

音楽のことを考えると面白いです。別の人が作曲したものなのに、時に演奏者の個性が強く、演奏者のもののように聞こえたりします。

受講生の感想

「耳で聴くアート」は目には見えず、二度と同じものを聴くことが出来ない「時の芸術」であり、目に見えるものよりも貴重であるのかもしれないと感じた。このように考えると毎日の授業も芸術であるように感じてきた。

括りが無い気がして、それがとても刺激的だった。誰もやらないことをしようという逆張りでもなく、普通に、思いついたことをやるというのが魅力的に感じた。

数字は無限に続くイメージだったので、途方もなく感じて苦手だったのですが、有限だと急に身近に感じました。
"音"という感覚を様々なアプローチで可能性を探っていくことがとても興味深く、今回の授業を通して自分の中でも新たな感覚や思考が生まれた気がします。

雨漏りがアートになるとは思わなかったし、会場があそこだったからこそできるアートだと思った。また数字や文字の羅列と、それと同じ規則性でピアノやトランペットを演奏したものは、目で見つつ耳でも聴けるアートで、とても興味深かった。

耳で聴く、音で作られる作品などから展示の幅を広げられること新しい視点から展示を作ること。また、朗読という第三者の視点を入れるとさらに作品の捉え方が変化する過程に面白さを感じた。

普段、アートは目で見て楽しむことが多かったので、耳で聞くアートというのはとても新鮮で不思議だった。特に印象に残ったのは、雨漏りの音をアート作品にしたものだった。サンバのリズムのように偶然だったというのもすごいなと思った。そして、それをさらにアーティストとコラボして、別の作品になったというのも驚いた。アートってこんな風に広がっているのかと感じた。

偶然性から作品が生まれる、その過程をエピソードから知ることができて面白かったです。作品を視覚からではなく聴覚からみるという視点を養えました。視覚からは気付けないものに気付けた気がします。

新鮮な視点で面白かったです。日常生活の中にはアイデアに溢れているのだなと思いました。普段聴かないような音、聞き流している音を注意して聴かことができ、心地よかったです。ありがとうございました。

アンケート

●参加者：120名 ●回答：95名

どこで参加されましたか 会場 (88.4%) ・ オンライン (11.6%)

年代 10代 (34.7%) ・ 20代 (63.2%) ・ 60代以上 (2.1%)

内容はいかがでしたか 期待以上だった (57.9%) ・ 期待通りだった (40%) ・ 期待外れだった (2.1%)

難易度はいかがでしたか ちょうどよかった (78.9%) ・ 難しく感じた (18.9%) ・ ちょうどよかった (2.1%)

わかばキュレーターによる 音声コンテンツ作り

講座詳細

日 時： 11月18日(金)、12月2日(金)、24日(土)、1月13日(金)計4回

会 場： 佐賀大学本庄キャンパス

講 師： 花田伸一(キュレーター)

テクニカルサポーター：江頭宗次郎

全体を通して

「SMAART 耳で聴くアート」の活動の中でもっとも実験的要素の強いプログラム。活動2「わかばリポーター」育成では、ラジオ音声のみで展覧会情報やアーティスト・インタビューを伝えるなどの前例はすでに豊富にあるので講座もイメージしやすかった。一方、この活動3「わかばキュレーター」育成で想定しているのは、ラジオ音声そのものをアート作品の現場、美術展の現場として捉えるというもの。調べてみてもあまり前例が見当たらず、どのようなキュレーションが可能か講師側も受講生側も手探り状態で進めた。2022年度はひとまずアーティスト・インタビューから着手してみて将来開催されるであろう「耳で聴くアート」展の手掛かりを得ようとした。

試行してみて分かったことはアーティストの話をしっかり引き出すためには30分はかかるということ、またアーティストたちの過去作の中にも「耳で聴くアート」として再解釈できそうなものが少なからずありそうということ。

振り返るに今年度取り組んだアーティスト・インタビューは展覧会場や実物の作品といった主たる現場(一次情報)を補足するための従としての音声インタビュー(二次情報)という図式となっている。この図式を超えて音声コンテンツそのものが主となるようなキュレーションはいかに可能か。2023年度以降いよいよこの問題の核心への探求に取りかかることになる。





柳 健司インタビュー 今から終わりを考える

高沛遙 [2023年2月6日配信] 19'59"



SECOND PLANET インタビュー 近くのストーリーテラー

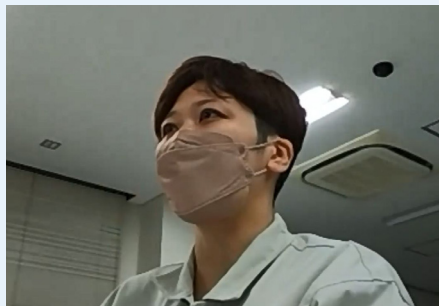
高沛遙 [2023年1月31日配信] 27'46"



佐脇健一インタビュー 彫刻家が形を手放すとき①②

見籾素子 [年度内配信予定]

① 20'00" ② 20'00"





KITA インタビュー インドネシアのアートコレクティブ『KITA』と考える帰る場所

副島大輔 [2023年2月6日配信] 25'45"



酒井咲帆インタビュー 帰ってくる場所の発生

山本哲平 [2023年2月6日配信] 35'05"



インタビューに工夫した点、大変だった点

インタビュー相手が複数人だったことから、番組の構成をどのようにするかかなり検討しました。
またインドネシア語を日本語に翻訳するフェーズがあったのでどの程度を良さとして残し、どの程度ストレスを排するか試行錯誤しています。
来年以降の講座で音声を現場とする展示をする場合には、根本的に発想を変える必要を感じるとともに非常に興味を湧きました。(webディレクター / 美術団体主宰)

今回のインタビューは、自分自身が参加者の一員になった状態と、自分がただの鑑賞者の状態二つ組です。私が構想したインタビューは、まず視聴者に今回の紹介作品を想像させるという点から、アーティストが表現したいことや共有したい意識を少しずつ展開するというルートです。実際にインタビューする時うまくいきませんでした。アーティストに対話する中で、作品のどの部分に気になりますか、特に答えが面白いと思います。どこまで鑑賞者に任せますか、最初から検討した方がいいかもしれません。
しかし、作品の中に隠したメッセージがいっぱいあります。例えばダクトを糸電話に連想するとか、インドネシアの屋台グッズの手作り感とか、そこをインタビューで引き出した方がいいと思います。(でも話題の引き出す方法が難しいです。今後はこれに努力します。)(大学院生)

当初は事前に質問事項をお送りし、インタビューは一問一答形式で進めていく予定でしたが、いざ録音を始めるとそれまでの打ち合わせとは全く異なり、佐脇氏が思いのたけを語り続けるという形となってしまいました。私自身もその話に圧倒されてしまい、進行の軌道修正ができなかったことは痛恨の極みです。
作家と聞き手のいずれかにイニシアティブがあるかは、収録の構成や耳で聞くアートのコンセプトそのものに影響を及ぼすのでその点について再考・再検討を行ったうえで、ぜひともまたインタビューを行ってみたいと思います。(美術館学芸員)

全体の感想

音声番組を作りたいというモチベーションで参加したので、とても有意義な講座にすることができました。機材など全く知らず、編集もしたことがないレベルからでしたが、なんとか番組を作るスキルを身につけることができました。
今後友人たちと番組をつくるために道具をいろいろ買ってしまったので、私たちオリジナルの番組を楽しみながら作ろうと思っています。(webディレクター / 美術団体主宰)

ほぼ反省です。他のメンバーのインタビューを聞くと、先にアーティストのイメージを視聴者に創造させるのも悪くないと思います。そもそも耳で聴くアートとは、作品が見られない状態です。「物」に拘らず、アーティストが何を言いたいということから、うまく伝えるかもしれませんと思います。(大学院生)

耳で聞くアートの在り方も、インタビューというドキュメンテーション・アーカイブと文字通りの「耳で聞くアート」としての作品で、コンテンツの方向性が大きく異なることは講義の最終回でも議題にあげられたものです。また、もともと興味があって「聴こう」として聴くものと、偶然耳にするセレンディピティの中で聞くのでは感じ方は違うでしょうしコンテンツ制作のアプローチも勿論大きく異なることでしょう。聞くも聴く、見ると観る、判ると解る、鑑賞と観察。
この耳で聞くアートが担う役割は、デジタルライブラリーなのか、美術家による展示品なのか、そのいずれでもないのか可能性はさまざまであることがわかりました。(美術館学芸員)

受講の中で花田先生が仰られていた、「インタビューでは作家の生い立ちなどからではなく、目に見えている情報など具体的な情報から作家のパーソナルな思考などを作家の言葉を通したり、質問をしたりして抽象的な情報も伝えていく」というような内容は、卒業後の作家活動やギャラリー運営など、美術を知らない相手に伝えるということを行う上でとても大事なことだと再認識できました。インタビューの日までは先生から伺っている情報などを除いては、あえてインタビュー相手である酒井さんの下調べを行いませんでした。理由は、文面の活字よりも酒井さん本人から出る熱量を纏った言葉を受け、酒井さんの活動などを理解したいと思ったからです。前日に搬入のお手伝いをしながらお話伺い、当日は具体的な情報から抽象的な情報を扱う順序を意識し、積極的に質問を行い、その質問に返ってくる酒井さんの言葉によって、よりインタビュー内容を深めようと努めました。普段は作家のインタビューを一对一で行う機会などありませんし、その分、集中して1人の作家と向き合える貴重な機会でした。ありがとうございました。(大学院生 / アートスペース「アートボッド99(つくも)」運営)

音声コンテンツ一覧

Audio Contents

活動 1：アートを楽しむ人の育成 耳で聴くアートセオリー + 聴覚で楽しむ美術展

中ザワヒデキ『近代美術史カセット』（アロアロインターナショナル、1990年）A面 2022年 10月 24日配信

「聴覚で楽しむ美術展」参加者音声 2022年 10月 25日配信

中ザワヒデキ『近代美術史カセット』（アロアロインターナショナル、1990年）B面 2022年 10月 31日配信

中ザワヒデキ「バカ CGのすすめ」（『デザインの現場』1990年 12月号、美術出版社、pp.50-55） 2022年 11月 7日配信

中ザワヒデキ「NEO-EXPRESSIONISM」（『美術手帖』1990年 7月号、美術出版社、pp.80-81） 2022年 11月 14日配信

中ザワヒデキ「SIMULATIONISM」（『美術手帖』1990年 7月号、美術出版社、pp.82-83） 2022年 11月 21日配信

活動 2：アート伝える人の育成 わかばりポーターによる音声コンテンツ作り

公開講座「広がる！耳で聴くアートの想像力 その1」アーカイブ配信 2022年 7月 9日配信

山口修平「ユウカイ犯(?) とアート体験」（活動② アート伝える人の育成 受講生制作コンテンツ）2022年 12月 16日配信

中尾絵里「中尾絵里と「にがお絵」描きまショー！」（活動② アート伝える人の育成 受講生制作コンテンツ）2022年 12月 16日配信

田中美佳（協力 柗谷剛）「Artで福祉を拓く」（活動② アート伝える人の育成 受講生制作コンテンツ）2022年 12月 16日配信

古賀隆正「Physical graffiti」（活動② アート伝える人の育成 受講生制作コンテンツ）2022年 12月 16日配信

副島・植松・柴田「一度見えたら見えなくなる」（活動② アート伝える人の育成 受講生制作コンテンツ）2022年 12月 16日配信

川浪綾乃「キッチンでギャラリートーク」（活動② アート伝える人の育成 受講生制作コンテンツ）2022年 12月 16日配信

活動 3：アートを支える人の育成 わかばキュレーターによる音声コンテンツ作り

公開講座「広がる！耳で聴くアートの想像力 その2」アーカイブ配信 2022年 12月 21日配信

高沛遙【SMAART2022】アーティストインタビュー -柳健司：今から終わりを考える
（活動③ アートを支える人の育成 受講生制作コンテンツ）2023年 2月 6日配信

高沛遙【SMAART2022】アーティストインタビュー -SECOND PLANET：近くのストーリーテラー
（活動③ アートを支える人の育成 受講生制作コンテンツ）2023年 1月 31日配信

副島大輔【SMAART2022】アーティストインタビュー -KITA：インドネシアのアートコレクティブ『KITA』と考える帰る場所
（活動③ アートを支える人の育成 受講生制作コンテンツ）2023年 2月 6日配信

山本哲平【SMAART2022】アーティストインタビュー -酒井咲帆：帰ってくる場所の発生
（活動③ アートを支える人の育成 受講生制作コンテンツ）2023年 2月 6日配信

見藤素子【SMAART2022】アーティストインタビュー -彫刻家・佐脇健一：彫刻家が形を手放すとき①②
（活動③ アートを支える人の育成 受講生制作コンテンツ）年度内配信予定

ウェブサイト

Web Site



サイトデザイン
山口恵美 (CW-BAKU inc.)

サイト構築
有限会社 イー・エム・エー

<https://saga-smaart.art.saga-u.ac.jp>

講師紹介

Navigator

活動1：アートを楽しむ人の育成 聴覚で楽しむ美術展



ギャラリーコンパ (石田陽介、松尾さち、濱田庄司)

石田陽介・松尾さち・濱田庄司がファシリテーションする「ギャラリーコンパ」は、視覚障がい者と聴覚者が、目の見える見えないといった互いの個性を活かし合い、共に語らいながらアート鑑賞を行うワークショップである。市民活動として2005年に始動し、主に北部九州の美術館やギャラリーで年3、4回のペースで開催している。

活動 2：アートを伝える人の育成 わかばリポーターによる音声コンテンツ作り



忠聡太 (メディア研究者)

ポピュラー音楽を中心に近現代の文化とメディアを研究する。史資料に基づく基礎的な調査に加えて、音楽イベントの企画や素朴な複製技術を駆使したワークショップなどをつうじた批判的なメディア実践に取り組んでいる。福岡女学院大学人文学部メディア・コミュニケーション学科講師。



鶴田弥生 (ディレクター兼ラジオパーソナリティ)

ラジオ番組を中心に音声メディア・コンテンツの企画制作・出演、イベントの企画制作・出演、ライターなど。2012年起業。2016年に論文「ローカル番組に関するブランディング・コミュニティの研究」を執筆しMBA 習得、「Best Leadership Award」受賞。情報発信や音声メディアの可能性、メディアリテラシーについて若者が学ぶ場としての番組も担当。

活動 3：アートを支える人の育成 わかばキュレーターによる音声コンテンツ作り



中ザワヒデキ (美術家)

1963年新潟県生。千葉大学医学部卒。1990年「バカCG」、2000年「方法主義宣言」、2010年「新・方法主義宣言」、2016年「人工知能美学芸術宣言」。3Dプリンタ関連特許。著書「現代美術史日本篇」。元・文化庁メディア芸術祭審査委員。



島袋道浩 (美術家)

1969年神戸県生。那覇市在住。1990年代初頭より国内外を旅し、そこに生きる人々の生活やコミュニケーションに関する作品を制作。パリのボンビドー・センター、ロンドンのヘイワード・ギャラリーなどでのグループ展やヴェニス・ビエンナーレ (2003、17年)、サンパウロ・ビエンナーレ (2006年)、リヨン・ビエンナーレ (2016年) などの国際展に多数参加。

全体



花田伸一 (キュレーター / 佐賀大学芸術地域デザイン学部准教授)

1972年福岡生。北九州市立美術館学芸員、フリーを経て2016年より現職。主な企画『6th 北九州ビエンナーレ〜ことのはじまり』『千草ホテル中庭 PROJECT』『ながさきアートの苗プロジェクト 2010 in 伊王島』『ちくごアートファーム計画』。企画協力『第5回福岡アジア美術トリエンナーレ 2014』『釜山ビエンナーレ 2014 特別展』他。



江頭宗次郎 (テクニカルサポーター / 株式会社丸宗)

ラジオ番組を中心に音声メディア・コンテンツの企画制作・出演、イベントの企画制作・出演、ライターなど。2012年起業。2016年に論文「ローカル番組に関するブランディング・コミュニティの研究」を執筆しMBA 習得、「Best Leadership Award」受賞。情報発信や音声メディアの可能性、メディアリテラシーについて若者が学ぶ場としての番組も担当。

佐賀モバイル・アカデミー・オブ・アート 2022 耳で聴くアート

令和4年度 文化庁 大学における文化芸術推進事業
～オーラルコミュニケーションを核としたアートマネジメント人材育成事業

主催：佐賀大学芸術地域デザイン学部

協力：佐賀大学美術館、佐賀県文化スポーツ局+社会福祉課

後援：佐賀新聞、NBC ラジオ佐賀、CROSS FM

佐賀モバイル・アカデミー・オブ・アート事務局 令和4年度企画運営スタッフ

花田伸一（キュレーター / 芸術地域デザイン学部准教授）

緒方和子（企画運営スタッフ）

江頭宗次郎（テクニカルサポーター）

芸術地域デザイン学部総務

佐賀モバイル・アカデミー・オブ・アート 2022：耳で聴くアート 記録集

発行日 2023年3月

編集 花田伸一 / 緒方和子

写真 長野聡史（長野聡史写真事務所）

※ pp.12-15, 18-19, 23, 25, 31-33, 35の一部, 36(上2枚)-37, 40

デザイン 山口恵美（CW-BAKU inc.）

発行 佐賀モバイル・アカデミー・オブ・アート事務局

佐賀大学芸術地域デザイン学部

〒840-8502 佐賀市本庄町1番地

TEL：0952-28-8349

公式 Web サイト <https://saga-smaart.art.saga-u.ac.jp/>